

## コロナ禍にあって

井上清彦 S41年経

朝食後いつものようにパソコンの前に座ると、南側のガラス窓を通して、暖かな日差しがまぶしいくらいに降り注いでくる。ときは春だ。浮き立つような気持ちになる季節なのに、気持ちがついてこない。

中国・武漢から始まった、新型コロナウイルスが、世界中に蔓延して、世界保健機関が、ついに「パンデミック」を宣言するに至った。

今朝、テレビが、ニューヨークダウが3千ドル近くの暴落を記録したと告げている。人の移動が制限され、実態経済にも大きな影響を及ぼし始めた。

私自身も、楽しみにしていた芝居やピアノコンサートはもとより、所属クラブの俳句、スケッチなどの活動も、軒並み中止に追い込まれた。私が幹事を務める4月初めの高校2年のクラス会も延期とした。出席予定だった熊本在住の元山男は、早割航空券が無駄になったとぼやいていた。

我が家では、妻が、一日中テレビの新型コロナウイルス番組を追いかけて「怖い、怖い」を連発している。厳しい検疫官である妻の承認を得ないと、私の外出もままならない。月2回の仕事、入院中のひとり暮らしの弟対応と、私の通院以外は原則として外出禁止だ。「あなたは危機意識が足りない」と言われ、このところほとんど家での「巣ごもり生活」を余儀なくされている。

東京にみぞれ混じりの雪が降り、桜の開花が宣言された。翌日の朝は、打って変わって風もなく良い天気だった。「ハイキング散策の会」の武蔵五日市里山で観梅ハイキングの日だったが、検疫官から参加の許可は得られなかった。それではと、毎年、桜見物サイクリングを楽しむ「善福寺川」を散歩の目的地に決め、一人で自宅から歩き始めた。

荻窪駅南口に出て、渡邊邸から「荻外荘の道」をたどって善福寺川に着いた。ここから川沿いの道を歩く。自転車でやっと通れる道幅だが、歩きだと狭さが気にならない。マラソンで行き交う人たちに道を譲りながら歩を進める。大勢の小さい子どもたちが、大声を出しながら遊んでいる姿が目立った。犬を連れた人たちも多い。

ソメイヨシノのツボミがところどころほころんでいる。「陽光」という名前の桜は満開だった。白モクレンも彩りを添えている。昼食後に出かけ、目的地の「尾





「崎橋」に着いて、近くの椅子に座って缶コーヒーを飲んで休憩する。まだ満開には早いので、桜の木々も目立たない。夕食の時間までに戻るため、早々に帰路につく。花々や、コサギの姿をカメラに収めながら、もと来た道を足早



に戻る。帰宅して万歩計を見ると1万6千歩を記録していた。妻は午後一人でのびのび出来たせいか、機嫌が良い。

それから三日後は、夫婦でお彼岸のお墓参りだ。

東西線「早稲田駅」から徒歩で、牛込弁天町の「草間彌生美術館」前にあるお寺に着く。受付で住職の奥様は「コロナの影響らしくて、いつもよりお参りの人は少ないです」と言う。墓前でコロナの早期の収束と、家族の安寧を願って頭を垂れる。

帰路、環状八号線・四面道近くでは、お気に入りの小さなフレンチレストランで昼食だ。店内の客は我々だけで、静かな音楽が流れている。食事前にトイレで、手を入念に洗い、持参したアルコールを含ませたティッシュで、ナイフとフォークをシェフに見えないように拭う。メニューは、前菜とハンガリー産の鴨肉、新鮮果物のタルトのデザートとコーヒーだ。約一ヶ月ぶりの外食に舌鼓をうった。

食べ終わるまで一時間ほどだったが、だれも客は入ってこない。三十歳代後半くらいの、一人で切り盛りするシェフに、「コロナで大変ですね」と声をかけると、「昼は、高齢者客が敬遠してさっぱりだけど、夜は、そこそこ入っているの、何とかなっている」との返事に、ちょっと安心した。コロナ禍のなか、若者を応援したい気持ちもあって、ここを訪れた甲斐があった。

私が編集長を務める所属クラブの季刊誌春号は、編集グループ全員が集まる最終読みあわせを3月1日に予定していたが、急遽、テレワークに切り替えた。メールのやり取りでまとめ、3月3日零時過ぎに、ネット入稿して一息ついた。

杉並三田会では、ホームページ委員会に属している。三月末の委員会は、開催できないので、テレワークで対応するとの連絡が委員長からあった。最近メンバーに加わった大学の名誉教授の木村さんから、「『スカイプ』を使ったらどうか」との提案があったが、時期尚早と見送りになった。私は、以前からスカイプに興味があったので、木村さんに連絡を取り、懇切丁寧な指導を受け、なんとか使えるようになった。パソコン画面で、相手のしゃべっている声が聞こえ、姿も見られる。お互いのデスクトップの画面も見られる。彼の属している学会では、これを駆使して、最近8人の会議を開いたという。スカイプがつながったとき、私は嬉しくて、世界が広がった感覚があり気持ちの高ぶりを感じた。

大学同期や、地元の「おとこのおしゃべり会」仲間などと、メールで「新型コロナ」や「巣ごもり生活」を話題に連絡をとりあっている。時には、声を聞きたくて、通話料金を気にしながら長電話をする機会も増えてきた。

「巣ごもり生活」を余儀なくされる環境にあって、本を読んだり、絵を描いたり音楽を聴いたり、断舎離を実行したりして、楽しんで行きたい。飽きたら、散歩とか、お気に入りのレストランの食事で気晴らしもいい。収束までにはしばらくかかりそうな「コロナ禍」にあって「巣ごもり生活」を味わって行きたい。

3月21

日記

その後、夫婦の恒例の善福寺川花見サイクリングは、青空の広がる3月25日に実現した。満開前の8分咲きだったが、満足した。

10日ほど前にテレビで放映された、ニューヨークで医療に携わる日本人女医の現地レポートに、妻はいたく衝撃を受けた。「今の東京の状況を見ていると2〜3週間前のニュー



ヨークを見ているようで、東京の先行きが憂慮される」との女医の発言だ。これを受け、我が家の検疫体制はますます強化されている。

花見サイクリングのほぼ2週間後の4月7日、東京都など主要感染地域に「緊急事態宣言」が発令された。強権による中国型でも、欧米型の都市のロックダウンでもなく、住んでいる一人ひとりの外出自粛に委ねる日本型で乗り切れるのか、真価が問われている。